

て黒き馬に乗、夜るは白きほろをかけて、葦毛の馬に乗て、軍のさきをかけける、誠に一人當千とぞ見へける、日來の詞に合てゆ、しくぞ侍りける、つゝに組合者なかりければ、自害してけり、〔古今著聞集偷盜〕後鳥羽院御時、交野八郎と云強盜の張本ありけり、今津に宿したるよしきこしめして、西面の輩をつかはして、からめ召れける、やがて御幸成て、御船にめして御覽せられけり、彼奴は究竟のものにて、からめて、四方をまさせむるに、とかくちがひて、いかにもからめられず、御船より上皇みづからかいをとらせ給ひて、御をきてありけり、そのとき則からめられにけり、水無瀬殿へ參たりけるに、めしすえて、いかに汝程のやつが、これほどやすくは搦られたるぞと、御たづね有ければ、八郎申けるは、年來からめ手向ひ候事、其數をしらす候、山にこもり水に入て、すべて人をちかづけず候、此度も西面の人々向ひて候つる程は、物の數共覺へず候つるが、御幸ならせおはしまし候て、御みづから御をきての候つる事、忝も可申上には候はねども、船のいかいはしたなく重き物にて候を、扇杯をもたせ候様に御片手にとらせおはしまして、やすくとかく御をきて候つるを、少みまいらせ候つるより運つきはて候て、力よはくと覺へ候て、いかにもものがるべくも覺へ候はで、からめられ候へぬると申たりければ、御けしきあしくもなく、をのれめしつかふべき事也とて、ゆるされて御中間になされにけり、御幸の時は烏帽子がけして、く、りたかくあげてはしりければ、興ある事になんおぼしめされたりけり、或所に強盜入たりけるに、弓とり法師をたてたりけるが、秋の末つかたの事にて侍けるに、門のもとに柿木の有ける下に、此師かたて矢はげて立たる上より、うみ柿の落けるが、この弓とりの法師がいたゞきにおちて、つぶれてさんぐにちりぬ、此柿のひやくとして、あたるをかいさぐるに、何となくぬれくと有けるを、はや射られにたりと思ひて、おくしてけり、かたへの輩と云やう、はやくいた、手を負て、いかにものぶべくも覺ぬに、此頭うてといふ、いづくぞと問へば、